

女性の高等教育の神学的意味：その必要性に関して見落とされている観点についての覚書

伊藤 勝啓

<要旨>

神学的人間論の観点から五つの命題をたてて、女性の高等教育との関係において考察する。以下、この五命題を記す。

1. 人間は自然と社会の関数として存在する。
2. 人間は「男と女」において自己を同定する。
3. 人間は神の戒めを破ることによって自己否定において自己を定立し、分化し、その結果を引き受ける。
4. 神の恵みは、人間の中に深く食い込んだ自己否定あるいは無化の問題が女性のための高等教育機関を要請することにおいて、「男と女」における「と」の問題、その関係性と連帯性を回復する一つの道を確保する。
5. 男と女への分化は、神の恵みのもとで許容されるとき、それは神からの賜物に変えられ、社会化され、同時に時代の中で課題とされる。

キーワード：男と女、無化、虚無的なもの、悪魔的なもの、神の恵み、賜物と課題

Keywords: man and woman, nothingness, de-humanization, the demortic, women's higher education, the grace of God, gift and task

はじめに

女性の高等教育を論じる際、これまでの論調の中で、女性の高等教育の時代は終わった、という見解が表明される。その理由は、第二次世界大戦後の男女共学の歴史が定着してきた、という一般論によるところが大きい。しかし、われわれの調査によれば、米国の女子大学が意欲的に行っている教育活動が支持され、国内外からも学生が集まっている状況があるのも事実である。本稿においては、人間の本性にかかわる神学的理解から問題の提起を行い、これまで見落とされてきた観点から、女性の高等教育の必要性との関係において論を進めたい。

命題1 人間は自然と社会の関数として存在する。

創世記の第1章において、人間は自然の創造の最後に創造された。稲垣久和氏がこの自然と人間との関係について「自然は人間の外にあって人間に対立するもの（Gegenstand）という概念は聖書にはない。」と指摘している点は重要である¹⁾。対象として客体化される

ものと違うということである。最初の「人」において自然は、敵対的でも、恐怖を与えるものとしても描かれていないのは重要である。なぜなら、イザヤ書11章において、新しいダビデ家のメシア的王の出現とその平和な支配が実現するとき、人間社会だけでなく、自然界にも、そして自然界と人間の関係においても、その融和的、平和な関係が実現することが歌われているからである。以下それを記しておく、

狼は子羊とともに宿り
豹は子山羊とともに伏す。
子牛は若獅子と共に育ち
小さい子供がそれを導く。
牛も熊も共に草をはみ
その子らは共に伏し
獅子も牛もひとしく干し草を食らう。
乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ
幼子は蝮の巣に手を入れる。
わたしの聖なる山においては
何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。
水が海を覆っているように
大地は主を知る知識で満たされる。(イザヤ書11章6－9節)

このような印象的幻は、人間の支配に対置される神の創造とその支配の成熟を描くものである。そのことを念頭におきながら、神によって人間は自然界の管理責任を命じられた、と告白するP典の言葉は重い。この人間は「男と女」の関係性において「神のかたち」と呼ばれる。これがP典の創造物語の根幹である。創世記第2章のJ典においては創造界物語的に語られ、自然と人間との共存関係が示される。P典との違いは、人「アーダム」を深く眠らせ、その「あばら骨の一部」を抜き取り、「女」を造った、という点である³⁾。人「アーダム」は「男と女」であるとするP典と根本的には同じであり、優劣、上下の関係はなく、対等の関係である、と言われよう³⁾。ここに人間は「自然」と「社会」の関数として見られる思索の足跡を辿ることができよう。

命題2 人間は「男と女」において自己を同定する。

神の創造において人間を男、そして女として創造したのではなく、「男と女」の関係性、連帯性においてはじめて、「神の像、似像」(以後キリスト教神学の述語として *imago Dei* とする) と呼ばれる⁴⁾。 *imago Dei* は神の尊厳を備え、同時に自然の管理責任を委ねられる。しかし、J典によれば、土の塵から創られ、神の息を吹き込まれてはじめて「人」となる。非常に象徴的表象である⁴⁾。また、P典における人間はこの「男と女」における接続詞「と」の関係性、連帯性における歪み、亀裂、破壊は、創世記によれば、「食べては

ならない」と命じられた木から、蛇の囁きによって、人間が神の戒めを破って木の実を食べたことに始まる。創世記は、人間がその存在を第1に神との関係、第2に自然との関係、および第3に「男と女」としての関係に必然的に負っていることを証言する。したがって、その第1の関係がくずれるとき、第2、第3の関係も問題化することを暗示している。これは人間が人間であることを否定する問題であろう。

命題3 人間は自己否定において自己を定立し、分化し、その結果を引き受けることになる。

「男と女」としての人間は神の戒めを破ることに際して相手をパートナーとしてではなく、互いをオブジェクト、すなわち、客体、対象とみなすことになる。戒めを破る前の人間は「人と妻は二人とも裸であったが、恥ずかしがりではなかった。」(創世記2章25節)ところが、いったん戒めを破ったとき、「二人の目は開け、自分たちが裸であること知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。」(同3章7節)ここに性的目覚めが示されている。さらに主なる神がエデンの園の中を歩く音を聞き、「アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れ」(同3章8節)た。「避ける」および「隠れる」という行為が記されている。するとアダムを呼び、「どこにいるのか。」(同3章9節)と訊ねる。これは単なる場所の確認だけでなく、アダムの存在根拠をも問うものである。アダムは場所を告げず、ただわたしは裸なので、「隠れています。」(同3章10節)とだけ答える。ここにアダムの言い訳が伝えられるが、場所も裸の理由も語らない。神はアダムに裸の認識の出所を訊ねとともに、戒めを破ったのか、と問う。ところがアダムはそれには直接答えず、「あなたがわたしと共にいるようにして下さった女が、木から取って与えたので、食べました。」(同3章12節)と責任の転嫁を「女」にする。明らかにここでは「女」はオブジェクト化されている。関係性を失い、連帯性を失った、自分とは違った存在とみなしている。その女は蛇に責任を転嫁する。創世記の編者は注意深く物語を進め、蛇と「女」と「男」にそれぞれ生きてゆく労苦を課する。そしてエデンの園から追放され、「男と女」としての人間から分化した男と女として生きる道を歩む。アダムは女をエバ(命)と名付けた。もはやパートナーとしての関係性と連帯性における存在ではなく、「命あるものの母」(同3章20節)と見たのである。しかし、それにもかかわらず、主なる神は、この男と女に「皮の衣を作って着せられた。」(同3章21節)主なる神はこの人間の破れにもかかわらず、その根源的問題性にもかかわらず、分化したこの二人を守り、恵まれた。

しかし、分化した二人は自分たちの子どもに「兄弟殺し」(同4章1-5節)の事件が起こるのを経験する。弟アベルを殺したカインは自分の犯した罪の重さに神に訴える。神はカインに出会う者が彼を撃つことのないように「カインにしるしを付けられた。」(同4章15節)問題を抱えることになった人間には「墮落と不法」(同6章11節)が満ち、「ノアの洪水」の原因を作る。「バベルの塔」(同11章1-9節)の物語における人間の間におけ

るコミュニケーションの断絶の問題が語られる。人間のおごり、神になろうとする人間のおごりを神は糺されたのである。十戒における「殺し」の禁止、神ならざるものを神となすことの禁止がすでにここに見られるのである。人間の墮落と不正、おごりにもかかわらず、創世記の編者はアブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフの中に変わるもののない救済史の糸を紡ぐ。

この人間の自己否定、非人間化は現代神学において「悪魔的なもの das Demonische」、「無化するもの das Nichtige」とも言われ、キリスト教社会倫理の問題としては「システミック・イヴル (systemic evil)」とか「制度化された不正 (institutionalisiertes Unrecht)」とか呼ばれる⁶⁾。このような、人間に立ち現れる無化の力は教育、特に女性の高等教育を考えると、無視することが出来ないものであろう。このような力は人間の支配の構造と深くかわり、特に社会的弱者に影響を与えてきたからであり、今日においても同様の事が当てはまるであろう。「無化するもの」あるいは「虚無的なもの」はキリスト教神学において自覚的に取り上げたのはパウロの「ローマの信徒への手紙」であり、その第8章において「被造物は虚無に服している」(8章20節)と記し、さらに「被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。」(22節)とその深刻さを理解する。この「虚無的なもの」は人間の自由を阻み、人間らしさを奪うものである、と言えよう⁷⁾。

したがって、女性の高等教育を考えると、男女共学の流れと共に女性のための高等教育機関をもつことは、共学の高等教育とは違う視点を取ることで、また女性の自由を生み出すこと、ひいては男性の自由を回復することに貢献するものであろう。人間の支配の構造は圧倒的に男性に有利であるので、その支配構造を批判し、修正し、さらには新しい社会構造を生み出してゆくには女性の自由を保障することを真剣に考え抜く女性のための高等教育機関が必要である。当プロジェクトが米国の女子大学を訪問し、その内容を検証した際に、女性のための高等教育機関の在り方に注目したもの、そこに狙いがあった。

命題4 神の恵みは、人間の中に深く食い込んだ自己否定あるいは無化の問題が女性のための高等教育機関を要請することにおいて、「男と女」における「と」の問題、その関係性と連帯性を回復する一つの道を確認する。

人間の男と女への分化は、アダムとエバにおいて決定的であること、同時に労働と生みの苦しみに象徴される人生の課題を与えられたことは前述したが、それにもかかわらず神は恵みをもって二人の道を守られた。エデンの園を追放されたが、それにもかかわらず神の恵みのもとにおかれた。ノアの洪水によって自然界も人間界も壊滅的な打撃を受けたが、その関係性、連帯性を神は守られた。バベルの塔の事件における人間の言語及び文化は壊滅的打撃を受けたが、アブラハムにおいて神は再びその救済の約束と恵みとを示された。

女性のための高等教育機関の設立は人間の男女への分化のもつひずみを神の恵みのもと

に回復することにつながる。特にキリスト教主義大学及び女子大学はこのことを銘記する必要がある。単なるヒューマニズムではこの分化の問題は解決できない。ヒューマニズムとの連携は重要であり、必要であるが、人間の男女への分化の根本にある自己否定と無化が神との関係性を失ったことによると考えるキリスト教の立場は神なしに、神の恵みなしにその分化の課題を果たすことはできない。キリスト教の女子大学の存在はこのことを絶えず人間社会に訴えるものである。日本における女性の高等教育機関がキリスト教の見地から多く建てられたのは歴史的な理由のあることは首肯できるが⁹⁾、現在われわれはキリスト教神学の人間理解の見地から女性のための高等教育機関の必要性を訴えるものである⁹⁾。

命題5 男と女への分化は、神の恵みのもとで許容されるとき、それは神からの賜物に変えられ、社会化され、同時に時代の中で課題とされる。

「男と女」への分化は神の戒めを破った人間の根本的問題性の発露であることが命題2で述べられた。しかし、パウロが語るように、イエス・キリストにおいて神の約束が「然り」(アーメン)となったということは、この然りにおいて人間は「男と女」として神の恵みのもとにおかれることを意味する¹⁰⁾。「男と女」への分化は否定されるべきものから、賜物(Gabe)へと変えられる。男女が相互に排除されたり、単独にされたりすることなく、隣人として向き合うものとされる。それが社会化されるとき結婚という形態をとる場合もあり、結婚してもしなくても、神の恵みのもとで隣人として向き合う関係も許される。これは人間の自由の問題として重要であろう。この問題は女性の高等教育の中でも考えるべき事柄である。

「男と女」の在り方が賜物へと変えられ、社会化されるとき、時代の中で課題(Aufgabe)となる。どのような「男と女」の関係性・連帯性を生み出すのか、答えは一つではないだろう。男性が女性化したり、女性が男性化したりすることではなく、性の中性化という結果にはならないし、なってはならない。なぜなら、神はイエス・キリストにおいて人間を「男と女」として受け入れたからである。人間であり続けるなら、人間は「男と女」において決定的に人間となり、それ以外に立つべき場所はないのである。したがって、女性(また男性)の高等教育の中で、神の許容された現実(賜物)をないがしろにして社会化の道を歩むのではなく、その賜物を課題として時代の中で「男と女」として生きる道を見出さなければならないことをキリスト教の高等教育機関は模索する。人間の支配の構造を明らかにし、それぞれの職業、教師、立法者、司法関係者、報道人、軍人、商社人等、どの職業においてもこの「男と女」として歩むことを阻むものを取り去る必要がある。そのためには高等教育、特に女性の高等教育は不可欠である。人間の支配構造は長く男の手中にあり、「女」であることを封じる場合が多いからである。それゆえ、賜物は絶えず課題として時代の中に生かす工夫が必要である。これは「男と女」としての人間はその社会化のプロセスを通して新しい公的秩序を形成することを意味する。

おわりに

五つの命題のもとに女性の高等教育に関して直言されてこなかったか、見過ごされてきた観点をあげて論じてきた。そしてキリスト教的人間観のもとでもう一度女性の高等教育の場としての女子大学の必要性和、同時にその刷新に向けた努力が必要となっている。専門の学問体系を身に付けてゆくことだけでなく、われわれの現代文化がどこから始まり、どういう問題を抱えてきたかを共有するような女性の高等教育の共同体を自覚的に作って行くことにつなげてゆきたいものである。その際、キリスト教は単なるお題目ではなく、共同体を形成する土台となり、新しい社会を生み出してゆくエネルギーとなるであろう。ルフェーヴルやパネンベルクは人間を考えるヒントを提供してくれるが、女性の高等教育への接続はない。その点短いが、2005年にキリスト教学校教育同盟と日本カトリック学校連合会によってできた「キリスト教学校教育懇談会」がおこなった講演会で講演された聖心女子大学学長山縣喜代氏のブックレット『女子校は時代遅れか——現代社会における女子校の存在意義と使命』は含意をもつ語り掛けであることを付記しておこう。今後の課題はキリスト教神学の中に女性の高等教育機関に関する関心を引き起こすことである。

注

- 1) 稲垣久和 (1993)、318頁。
- 2) ここで、「女」と訳されているヘブライ語は「イッシャー」であるが、ちなみに、「男」は「イシュ」である。一種のこぼれ遊びであるが注解者は語源的基盤がない、と言う。Speiser(1964)、18頁を参照。
- 3) 橋本典子 (1994)、54-56頁を参照。また、「あばら骨」に関して、シュタインザルツ(1990)はあばら骨を表す「ツェラ」と言うヘブライ語について、「……普通、「あばら骨」の意味に解されているが、「ツェラオット・ハミシュカン」(幕屋の両側)という熟語に見られるように、「側」の意味にも解することができる。」と言い、さらに、「女はアダムの「ツェラ」から創造された。ということは、女が、後に別個の二人の人間になるべき最初の人間のひとつの「ツェラ」から、すなわち、一つの側から始まったということにほかならない。」と述べている(同書、21頁)。この創造物語の起源が、シュメール神話との類似性が言われているが、ウーリッヒ (1998)によれば、「あばら骨」はシュメール語で「ティ」と言われ、同時に「矢」をも指すとも言われる(54-55頁参照)。それは広義における人生、いのちを指すものと解することが可能である。
- 4) この点で神学者バルトはその『教会教義学』のⅢの1、Ⅲの2、およびⅢの4において膨大な研究を現わしている。「男と女」としての人間をバルトは「連帯の人間(Mitmensch)」と呼んでいる。前掲書Ⅲの4英訳のⅢの4、54節1項、116頁以降を参照。英訳はMitmenschというドイツ語をthe fellow-manとしている。
- 5) これはヘブライ語では「ネフェシュ」と言われるが、これは人間が単に身体的、精神的、社会的存在であるだけでなく、神のいのち、神の霊を吹き込まれた「生きもの」であることを示し、神との関係なくして人間でありえないことを証言している。

- 6) プロイニング (1988) の論文を参照。
- 7) このパウロの言明はアウグスティヌスの神学に受け継がれ、現代神学においては弁証法神学に受け継がれ、特に人間の支配の絶対化を招いたナチズムに対して抗議して出された『バルメン宣言』に継承される。バルトはこの『宣言』の起草者の一人でもある。
- 8) 井上大衛 (1992) を参照。井上は日本の女子教育が二重の意味で歴史的であったことをしめしている。第一は近代日本のキリスト教的女子教育が1870年に始まったこと、その背後にアメリカのキリスト教界に起きた第2次信仰覚醒運動という歴史的要因を結び付けている。日本の女子高等教育を考えると、信仰覚醒運動をきちんと捉える必要がある。そのためには Gaustad (1957) が今日でも有用である。さらに金子忠史 (1984) は貴重である。
- 9) 山縣喜代 (2005) は、そのⅢ「女子校の意義と課題」において実際的な女子教育の意義を項目的に挙げているのは好感が持てる。われわれはそのことも念頭におきつつ、その神学的意味づけを考えておかねばならない。ちなみに、山縣があげる5点を再録する。
 - ・未だ男女平等でない社会の変革
 - ・女性の視点を生かしたパラダイムの転換
 - ・対等な男女の相互作用からくる奥行きのあるものの見方
 - ・命を宿す性としての感性を生かした、いのちが大切にされる社会づくり
 - ・発展途上国等における女性たちとの連帯を通しての平等な社会づくり
- 10) コリントの手紙二、1章20節を参照。さらにその重要性についてはこの箇所の注解を見るが良い。

参考文献

- バルト、カール。『教会教義学』Ⅲの1，2および3。
- プロイニング、ネル。「制度化された不正とは何か」『神学ダイジェスト』冬65。上智大学神学会神学ダイジェスト編集委員会、1988：75-80。
- Brunner, Emil. *Man in Revolt*. Ohiladelphia: The Westminser Press, 1939. [これは Luther Press 1937年よりでたものを The Westminster Press が再版したものである。]
- Gaustad, Edwin Scott. *The Great Awakening in New England*. N.Y.: Harper & Brothers, 1957.
- ゲーレン、アルノルト。『人間：その本性及び世界における位置』法政大学出版会、1987。
- Graff, Ann O'Hara, ed. *In the Embrace of God: Feminist Approaches to Theological Anthropology*. N.Y.: Orbis Books, 1995.
- 橋本典子。「女性論についての断章」青山学院女子短期大学総合文化研究所年報第2号所収、1994：52-63。
- 稲垣久和。『知と信の構造』ヨルダン社、1993。
- 井上大衛。「キリスト教女子大学の現状と課題」『活水論文集』第35集：57-63 (1992) 所収。
- 金子忠史。『変革期のアメリカ教育——大学編——』東信堂、1984。
- 絹川久子。『聖書のフェミニズム：女性の自立をめざして』ヨルダン社、1987。
- LeFevre, Perry. *Understandings of Man*. Philadelphia: The Westminster Press, 1977.
- MacHaffie, Barbara J. *Her Story: Women in Christian Tradition*. Philadelphia: Fortress Press, 1986.
- 松木真一。『人間存在の探求：キリスト教的人間論の根本問題』創元社、1988。

- Niebuhr, Reinhold. *The Nature and Destiny of Man I & II*. N.Y.: Scribners, 1964 [初版はそれぞれ、1941と1943年]
- Pannenberg, Wolfhart. *What is Man?* Philadelphia: Fortress Press, 1970. 原文は *Was ist der Mensch? Die Anthropologie der Gegenwart im Lichte der Theologie* (Vandenhoeck & Ruprecht, 1964) の第2版からの英訳である。
- Pelphrey, Brant. *Christ our Mother: Julian of Norwich*. London: Darton, Longman and Todd Ltd, 1989.
- ポラニー、マイケル。『人間の研究』晃洋書房、1990。
- 同上。『人間について』ハーベスト社、1990。
- Speiser, E.A. *Genfsis*. U.S.A.: Doubleday, 19.
- ウーリッヒ、ヘルムート。戸叶勝也訳『シュメール——人類最古の文明の源流を辿る』アリアドネ企画、1976。
- 山縣喜代『女子校は時代遅れか：現代社会における女子校の存在意義と使命』ドン・ボスコ社、2005。